

茶の湯文化学会会報 No.42

第42号 / 2004年 9月11日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

茶の湯における自然

美濃部 仁

現代に生きるわれわれにとって自然破壊が大きな問題であるということは、残念ながら、もはや常識である。しかし、それがどのような問題であるのかということとは、それほどはっきりしているわけではない。そもそも破壊されている「自然」とは何かということ自身、よく考えてみると明らかでないように思われる。

「自然」の反対は「人工」であるから、自然とは人工でないものである、という見方がある。人工的とは人間の手が加わっているということであるから、この場合、自然とは人間の手が加わっていないものであるということになる。この見方は一般的なものであるが、しかし、十分ではないように思われる。というのも、このような自然観に基づいて自然破壊の問題を考えようとすると、われわれはたちまち行き詰まってしまうからである。もしも人間の手が加わっていないものが自然であり、その破壊を阻止することがわれわれの課題であるならば、われわれの為すべきことは、人間がなるべく何もしないようにすること、究極的には、人間がこの世からいなくなるよう努力することになっ

これは極論のように見えるかもしれないが、案外基礎的なことである。多くの真面目な人たちが、自然破壊の問題に取り組み入り口で、このことにつまづいているのではないだろうか。ある人たちは、自然を守るために文化的生活を全否定するという方向に進んでいるように思われるし、またある人たちは、人間存在を否定する思想はナンセンスだとして自然破壊の問題自身に背を向けているように思われるが、それらはともに、右のような自然理解に基づく態度であろう。これらの態度には無理があると私は思う。そしてその無理の原因は、自然と人間を対立的に捉える自然観にあると考える。

それでは、自然と人間を対立的に捉えるべきでないとすれば、両者は元来融和しているというふうに見るべきだろうか。しかし、そのように見るならば、自然破壊という問題自体が存在しないことになってしまう。それは真実とは思われない。われわれは、自然と人間をどのように認識すべきであろうか。

真実の認識に到達するためには、自然と人間を固定的に、つまり対象的に見る見方を去る必要があるように思われる。自然と人間は、それぞれ独立に存在する

ものではない。自然は、われわれ人間の外に、われわれと無関係に存在するのではない。自然は、われわれがそこに於て生き、死んでゆく場所である。このように見るならば、自然はわれわれにとってすでに与えられているものではなく、むしろわれわれの生き方、死に方を通して実現するものであると言える。われわれの生き方死に方が自然でないとき、われわれの生死の場所は自然とは言えない。われわれが自然に生き、自然に死んでゆくところに、自然が実現するのである。

自然をこのように理解するならば、自然実現の要は、われわれ人間の「自然な」あり方に存することになる。自然とは、自然なあり方をする人間とその人間を包む場所の全体であると考えられるからである。では、人間の自然なあり方とはどのようなあり方であるのか。

このことを考えるにあたっては、仏教が大きな手がかりを与えてくれるように思われる。というのも仏教は、ある観点から見れば、まさに自然にあることこそ人間の真のあり方であると説いているからである。たとえば親鸞の「自然法爾」は、それを端的に表現したものであろう。親鸞は、われわれが「はからい

をもたないことが「自然」であり、それが「法爾」すなわち真理そのままであると書いている（『末灯鈔』）。はからいをもたないということは、執着を離れるということである。執着を離れるところに「おのずから」真理が実現すると親鸞は言うのである。これは、釈尊以来の仏教の基本的な見方である。釈尊はじめての説法で、あらゆる苦しみの原因である執着の心を離れるよう説いたと伝えられている（『初転法輪経』）。

さて、執着を離れたところに実現する自然なあり方が人間の真のあり方であるという見方は、茶の湯にとっても親しいものである。『南方録』覚書には次のような文章がある。客亭主、互の心もち、いかやうに得心してしかるべきやと問。易の云、いかにも互の心になふがよし。しかれどもかないたがるはあし。得道の客亭主なれば、をのづからこころよきものなり。

ここには「おのずから」こころよいというあり方が、客亭主の真のあり方であるということが書かれている。それは、これまで用いてきた言葉でいえば、自然なあり方ということであろう。そして、そのようなあり方は「得道」すなわち悟りによって実現するものであ

るということが明記されている。互の心に「かないたがる」のは、はからい即ち執着である。その執着を離れ得たところにはじめて「おのずから」真の人間のあり方が実現するというのが『南方録』の見方である。

自然を対象的に見ることをやめ、自己の事柄としてとらえてみると、はじめに述べた自然破壊に対する認識も変わってくる。自然を実現するのがわれわれであるならば、われわれが山や川に手を加えることそれ自身が自然破壊であると言えないことは明らかである。問題となるのは、われわれがどのように手を加えるかである。われわれが何かに執着して、すなわち我執に基づいて山や川に手を加えるとき、あるいは手を加えずに放置するとき、そこには自然は成立しない。そういう意味で、それが自然破壊である。それに対して、われわれが我執を離れて無心に作為するとき、そこに真の意味での自然が成立するのである。茶の湯においては、そういう無心の作為が重んじられているのではないかと思う。

(明治大学助教授)

創立一〇周年記念茶会

創立一〇周年を記念し、五月一五日(土)東京茶道会館において茶会を開催した。当日は天気も良く茶会日和で、濃茶席、煎茶席、浅酌席ともに趣向を凝らした興味深い席であった。

濃茶席 (裏千家流)

戸田即日庵

寄付

武野紹鴎消息「めつらしき花一本…」

本席

床 古嶽宗巨筆「吸江」(江月宗玩訓点 添状)

花入 竹花入(紹鴎在判、益田純翁旧蔵)

香合 島物古満(利休在判、元伯所持)

釜 角雲龍(与次郎作)

風炉 今戸焼四方形

風炉先 金田精香堂製

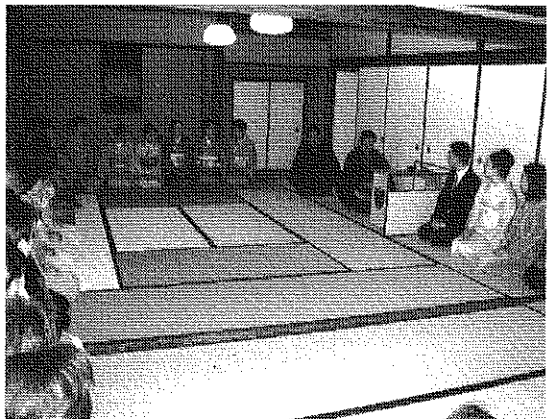
棚 重宗甫棚(信斎作)

水指 鉛釉矢筈口(一入作)

茶入 瀬戸肩衝銘「郭公」(玄々斎消息添)

袋 古金襴焼切

茶杓 竹節無(紹鴎作、共筒)



煎茶席 (小川流)

待合

軸 皆川淇園長篇詩「夜坐不厭湖上月…」

花器 鏡組(尚古斎作)

小川後楽

炭飾 彩棧 副物 月琴 敷紙 籐本席

軸 亀田鵬斎筆秋景瀑布図

花器 秋成筒「たかむらに朝けの煙…」(尚古斎作)

香炉 唐物白玉

香筒 唐物斑竹双管

香盆 黒柿葉盆

香 開運(豊田愛山堂製)

手前荘

涼炉 雷神浮彫亜字風門(昌平宝山作 炉台共)

湯瓶 白泥(和善作)

湯瓶台 錫菊花式(蔵苑作)

蓋置 染付三宝式(和善作)

棚 桑凸凹棚(満樹作)

手前盆 松一文字(道仙作)

結界 斑竹

水注 赤絵童子遊図(竹泉作)

茶碗 染付兔道鳥瞰図米末写(竹軒作)

茶托 唐物錫五君子劍木瓜式(沈存周)

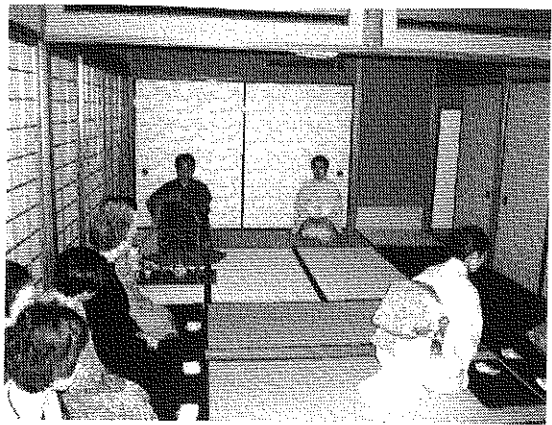
茶壺 唐物古錫菊花式

茶則 白竹牡丹図(翁祖團刻)

茶瓶 宜興白泥(惠孟臣作)

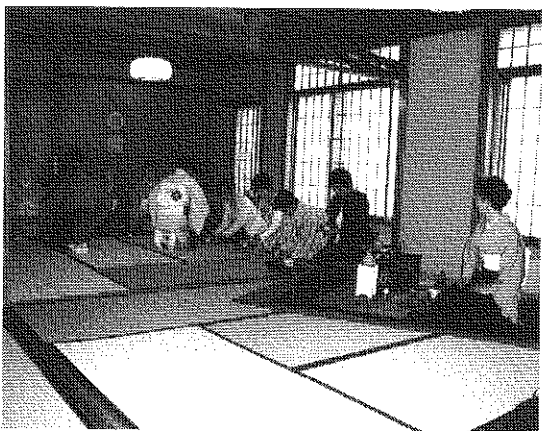
湯冷 染付詩文(竹泉作)

茶巾入 染付五世後樂筆「長樂万年」(和善作)
 盆巾入 染付龍文図(祝峰作)
 建水 黄銅太極紋透(藏六作)
 炭籠 烏竹提梁(尚古齋作)
 羽箒 うずら羽
 火箸 可齋翁所持
 教茶碗 秋成・竹田翁和歌青華碗(竹軒作)
 茶葉 舞鶴(松風園詰)
 菓子 薯蕷饅頭太極紋(塩瀬繪本家製)



煎茶席(壳茶流) 高取友仙窟
 寄付
 酒旗 富岡鉄斎書「大隠」
 茶具図 茗壺図録(明治九年刊)
 茗薫図録 青湾茶会図録(文久二年刊)
 茗碗 青華磁盧同七句(青木米米作)
 席
 掛幅 壳茶翁筆「夢中作」、渡辺華山筆
 壳茶翁図(若冲筆臨模) 合装
 花器 七官青磁 鯉耳 八稜
 挿花 天台鳥葉 蘭
 香炉 白高麗 鼎式
 香盆 螺鈿四方 葡萄唐草文
 香筒 象牙 山水樓閣人物文
 香枕 水晶 帶鉤 龍
 器局 煤竹 水裂 万字組 長方
 茶壺 色ガラス 水藻紋 小壺
 (エミール・ガレ作)
 茶合 古竹 浦上春琴修竹図 頼山陽七絶贊
 (細川林谷作、江馬天江旧藏)
 袱紗 印度更紗 花唐草文
 茗碗 青木米米写 青華磁 盧同七句
 (五代三浦竹泉作)
 托子 黄銅 木瓜式 福寿透(中川浄益作)

水注 藍絵オランダ 後手花唐草獸文C B 銘
 巾筒 碧紅釉 金描 雲龍文
 (二代三浦竹泉作)
 涼炉 白泥 四方式 円窓風門 富岡鉄斎筆
 湯沸 紅泥 横手(谷川青山作)
 炉台 交趾 綠釉 方式 輪繫透
 茶鉢 茗壺図録所載 奥蘭田旧藏 玉川珍写
 (初代山田常山作)
 湯冷 白高麗 馬上杯 瑞花瑞鳥文 貼花
 点盆 純錫 輪花六稜 人物図
 鳥府 唐物 籐細編 手付 虫箆
 炉扇 白籐編 壳茶翁形(鈴木玩々齋作)



火箸 砂張 金象嵌 砑頭(大西成古作)
 瓶敷 籐編 円式 輪繫(鈴木竹朋齋作)
 洗瓶 古七宝 上手式 花卉図
 巾床 白氈 透彫 紫檀縁
 納汚 李朝 白磁 小壺
 茶具敷 緞子 緑地
 炉焜 松木地 斑竹縁 四曲
 茶銘 鳳凰(大正園詰)
 菓銘 嘉辰(松華堂製)
 菓子器 春慶 四方 縁高重 文人寄書

插花 杜若
 花器 景德鎮五彩 魚藻文 魚缸(萬曆銘)
 卓上挿花 蒼山杜鵑
 卓上花器 景德鎮盧均釉 奇石尊
 卓 黄楊木葡萄盃 四方小卓
 涼炉 白泥四方 子母爐(青木米米作)
 炉座 素泥窯変 円板式
 酒鉢 素泥 狛鈕 急燒式(仁阿彌道八作)
 銚座 木地螺鈿 卷貝式 八方板式(昇玉好
 大原貫字作)

鳥府 紫竹網 小藍筒(初代尚古齋作)
 火箸 鉄地金錯 草花文 有鎖
 羽箒 鳩 竹皮柄
 瓶敷 籐 小編
 點心器
 盤 景德鎮藍金欄手 樓閣双鳥文、景德鎮
 藍金欄手 玉取獅子文、璋州窯藍具須
 芭蕉鹿文、湊燒三彩手、竹林七賢文
 輪花
 茶注 白磁割畫 龍鳳瓶(昇玉好
 真葛香齋作)

浅酌席(一茶庵宗家) 佃 一輝

酒注 青竹
 銘酒 菊正宗
 巾筒 白竹 横行君子刻(平井汲哉作)
 酒盃 景德鎮古染付 捻子文輪花
 (浅見家伝来)

漱茶 青茶
 替 白磁金欄 牡丹文
 (江南好 真葛香齋作)
 盃托 古錫 扁舟式、古錫黄銅錯 厥魚式
 (林天昌款)

前席
 掛幅 杉臆雨筆「下戸不許入柴門」
 古瓢 細川林谷遺愛瓢 銘「龍卵」
 本席
 掛幅 池大雅筆怪鬼彈琴図
 盛果 黄楊木刻彩色「青梅 松果」
 果盆 朴木地 芭蕉盆(今井応心作)
 次間床
 掛幅 鶴亭筆葡萄園
 酒具

替 白磁金欄 牡丹文
 (江南好 真葛香齋作)
 盃托 古錫 扁舟式、古錫黄銅錯 厥魚式
 (林天昌款)
 滓孟・洗瓶 黄銅 仕組
 肴皿 景德鎮朱地白花 脩竹文 小盤
 (道光銘)
 肴 結昆布
 肴箸 南嶺象牙頭 四方 小
 炭具



総会

本年度の総会を五月一六日(日) 九時半から東京四谷のプラザエフで開催した。ホルスト・ヘンネマン、高橋忠彦両氏を議長に選出した後議事に入った。

一五年度の事業報告・一五年度の決算報告が、日向理事・谷理事から説明された。その後、一六年度の事業案・一六年度の予算案が日向理事・谷理事から提案された。また、会誌原稿審査規程および会誌編集委員会規程の一部改正が了承された(内容は会報前号理事報告を御覧ください)。

議事終了後、本会前会長中村昌生氏による「創立一〇周年を迎えて」と題する挨拶に移った。本会創設時の苦労話や今後の本会への期待などをお話しいただいた。

平成一六年度行事日程
創立一〇周年記念茶会
日時平成一六年五月一五日(土)
場所茶道会館(東京都高田馬場)
内容濃茶席・煎茶席・浅酌席
記念大会・総会

七月二三日(金)
正村美里氏「ニューヨーク・織部展を振り返って」
小泊重洋氏「中国茶教本『茶務僉載』のこと」
九月二四日(金)
金巴望氏「李朝のやきものから見た高麗茶碗」
伊東明弘氏「『茶譜』に見る流儀の茶の成立」
一月二六日(金)
佐藤豊三氏「尾張徳川家の御庭と御庭焼について」
田中秀隆氏「未定」
二月二五日(金)
戸田勝久氏「尾張藩の茶の湯」

大会

本年度の大会を、総会に引き続き五月一六日(日)の一二時一五分からプラザエフで開催した。五つの研究発表と、二つの記念講演が行われた。要旨は次の通りである。

日時平成一六年五月一六日(日)
場所プラザエフ(東京都四ツ谷駅南口)
内容総会・研究発表・記念講演
研究会
第二〇回
日時平成一六年八月九日―十三日
内容宣化遼墓、河北文物研究所等見学
第二一回
日時平成一六年一月七日(日)
場所(京都市)
内容外国人研究者によるシンポジウム
創立一〇周年記念大講演会
日時平成一六年一月または二月
内容未定

近畿例会(会場池坊短期大学第一会議室 午後二時〜)
研究発表会または見学会を三回行う予定。(日時未定)

東京例会(東京芸術大学午後二時〜)
四月二四日(土)
田中秀隆氏「本能寺の変前日、茶会の有無」
中村修也氏「茶道研究史における茶人論」
六月二六日(土)
高橋忠彦氏「茶文化研究の動向―二〇〇四―
中日韓茶文化術研討会報告」

研究発表

禅院清規にみる茶湯とその展開

木村栄美

「茶之湯」の母胎は禅院茶礼にあるといわれている。その禅院における茶湯は「ちやのゆ」ではなく、「ちやとう」あるいは「さとう」といわれていた。こうした茶湯は、茶儀礼と湯儀礼を統合して行われていた。禅院では最も重要な「茶湯儀礼」は煎点であったが、煎点に準じて行われていた茶湯はどのような構造を持ち、どのように変化していったのだろうか。

清規の原点ともいえる『禪苑清規』では、茶湯は煎点を簡略化したものとして、下位の僧などに行うものとして扱われていた。しかし、一三世紀末から茶湯にも食儀礼が組み込まれ、煎点とともに饗応儀礼へと変化していった。

また、『喫茶往来』に記されている茶会は、前段は茶湯の次第に、中段は煎点の次第に類似しており、こうした次第は、一四世紀の公式儀礼でも行われていた。このことから茶湯は、煎点とともに公武儀礼に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

大前貴俊氏「ハタノソリタル」茶碗
とはいかなるものか」
七月一七日(土)
依田徹氏「天心と茶の湯」
小倉光夫氏「房総風雅史―地方茶道文化史の研究―」
九月二五日(土)
長谷川祥子氏「静嘉堂(岩崎家)の茶道具」
大前貴俊氏「宗易形茶碗とはなにか」
―千利休の創作―
一月二七日(土) 二月二六日(土) は発表者未定

高知例会(高知県立文学館慶雲庵茶室)
五月二三日(日)
小松聡氏「森田久右衛門日記」
九月一二日(日)
永吉溪滋氏「茶の湯と禅」(県立文学館)
一月二二日(日)
シンポジウムと茶事(二〇時〜)
三月 日(日) (日未定)
森一康氏「土佐藩の茶人」
東海例会(名古屋文化短期大学午後六時〜)
五月七日(金)
村上瑛二郎氏「川柳がとらえた茶の湯」
林順一氏「美濃藩における茶道具生産」

茶道具から見る近世中期撰北地域の茶湯

八尾嘉男

近世中期に活躍した撰津伊丹郷の茶人有岡道瑞は、茶湯の他会記を残している。この他会記を中心に諸史料を検討し、撰北地域の茶湯の地域的な特徴をつかむことを試みた。

近世中期撰北地域の茶湯は、酒造家を中心に医師や僧侶も含めた伊丹郷町と池田郷町を核とする撰北地域の人物、京都・大坂の町人、茶湯宗匠等の交流関係の下に存在し、そこには近衛家との茶湯での交流が指摘できる町人や近衛家の側近の参会が見受けられる。そして、頻度まではうかがえないが、経済的・行政的な面だけでなく茶湯を含めた遊芸の面での交流も、伊丹郷町と池田郷町を核とする撰北地域の人物と寛文元年から同地域に所領を持った近衛家の間に存在していた。そのことが禁裏関係者、特に近衛家の人物や近衛家と親交の厚かった人物が関与している茶道具が撰北地域の人物が催した茶会に多く見受けられる理由であろう。

茶の湯点前の比較研究―多変量データ解析による―(中間報告)
廣田吉崇

すでに一三流派の薄茶風炉運び点前を三二項目に分解し、類型化し、一致率のグラフ化を行なった。また、独自の分析方法により特異点・類似点群を分析考察した。

次に、以上のデータをより有効に分析するため多変量データ解析の方法を用いるとともに、積極的に各流派（三三流派）の点前を調査しデータ化し、四一項目の分析を行った。今回の発表では二つのデータ群の分析結果を報告する。一つは石州流三三流派のデータ分析、もう一つは全体三三流派のデータ分析である。それぞれ、数量化Ⅲ類によるグラフ化と、クラスタ分析による流派のグループ分けを行い、流派の歴史的な系譜との類似・相違を検討した。これにより、点前の相違が客観的に評価でき、歴史的な系譜と点前との相関関係が確認できる。また、流派の位置付けが推定できる。

「利休教歌」の系譜と配列

石塚 修

「利休教歌」（茶道百首歌）は、『紹陽百首』『利休百首』などと呼ばれ、利休百年忌前後に成立し、後に二百首、三百首へと進展していったとされてきた。筑波大学付属図書

館蔵『吃茶詠一百四十七首』もその一異本で、百首から二百首へと進展していく中間過程で編纂されたと推定し、他本との比較検討を行った。

その結果、本書は『紹陽茶湯百首』に近い配列系統に属していることが判明した。また、他本との校合により「利休教歌」には大きく分けて三系統あることが認められた。『利休居士教諭百首詠』・『法護普須磨』系統と配列の異なる「利休教歌」は少なくとも他に二系統ある。『利休居士教諭百首詠』・『法護普須磨』の独自の配列・選歌の傾向を検討することで、それらに深く関与したであろう裏千家十一世玄々斎宗室の茶道に対する志向を窺い知ることも出来るのではないかと推定される。

『山上宗二記』と『玩貨名物記』の弊害

―そして『松屋名物記』―

矢野 環

『山上宗二記』は、優れた天正末期の茶書ではあるが、これをもって珠光・紹陽を語るは誤りであり、永祿からの珠光称揚の流れの中にあり、京の茶人を嫌う堺の宗二によって記述されたことを考慮しなければならぬ。また、これをもって利休の名物観を記述する

のにも問題がある。茶入の選択をとつても利休のものとは異なり、永祿初期の名物観に一致する。

『玩貨名物記』は、「正保三年名物記」の乱れた写本に、明暦の大火の後万治元年あたりには献上された情報なども加筆して板行されたものであり、大名家等ではほとんど利用されなかった。影響力は民間の一部向け以外はほとんど無かったのが現実である。

『松屋名物記』については、さすがに利用されることが少なくなり、『清玩名物記』が利用されるようになったのは喜ばしい。

記 念 講 演

初期全真道士とお茶

蜂屋邦夫

初期全真道士は、全真教の初期の道士のことであり、全真教は、道教の一派である。道教は、自然発生的な宗教で定義が難しいが「道」を神格化して信仰する宗教と考えてまず間違いないと思う。教団があり、儀式があり、戒律があり、教典があるが、個人的な面としてみれば、「道」と同化する為の修行体系でもある。修行して何になるのかといえは仙人に

なるのであって、内容としては呼吸法とか薬餌法、導引（マツサージ）、穀物を食べない辟穀、房中などを体系化している。

後漢時代後半（二世紀）に起こった道教には、太平道と天師道の二つの流れがあったが、太平道は早く滅び、天師道が続いていく。信仰を集めた理由は病氣治療のためであって、四世紀には神仙信仰もあった。

「道」と同化するための薬餌として、不老不死をめざす錬金術（金丹道、外丹道）がおこった。合成してできた丹薬を呑むことで、不老不死を実現しようとしたが、結局は失敗し、身体の中に丹を形成すること（内丹道）を試みるようになった。

しかし金時代になり、いかがわしさを取り払い仏教なども取り込んだ、民衆の心に響く新しい道教が起る。全真教もその一つで、元時代に大発展し、天師道の流れを汲む正一教と共に現代まで続いている。全真教は出家道教で、正一教は家の伝統として道士を養成しようとする在家道教である。

全真教の開祖は金時代の王重陽で、主な弟子が七人おり、これを七真と呼んでいる。この八人のうち茶に関する詩詞を詠んでいるのは六人。多く詠んでいるのは王重陽と馬丹陽

で、あとの六人は茶に関しては冷淡であったと言えよう。

重陽は、茶を飲んで仙境に至るということをいうが、丹陽は睡魔をさるといふような常識的なことを述べる。重陽は、全真教を創始したこともあって、色々なことを利用して道を広めようとし、お茶を飲めば仙境に至るといふことを強調したが、丹陽は、茶の実利的な面を強調し、サロンのような俗世間の感情に陥ることを戒めたのではないかと推定される。その戒めが強く残って、丹陽の後輩達はお茶のことを詠まなくなったのではないかと今考えている。

日本における煎茶の成立

大槻幹郎

黄檗宗が入ってきたことが、煎茶が広まるきっかけになった。このことは以前から言われていたが、その裏付けがはっきりしていなかった。その裏付けとなる資料を見いだしたことから黄檗宗と煎茶の関係を考えるようになった。七年程前から「煎茶史逍遙」という題で連載をするようになったが、煎茶に対する興味が増大し、煎茶が黄檗から始まったと強く考えるようになり、茶の湯文化学会でもそのことについて発表した。

煎茶については、文人茶という面に注目するようになるが、まず文人画について調べ始め、やがて黄檗資料にたどり着く。そのきっかけは、尾形乾山の筆跡がある鳴滝の法蔵寺を見学に行ったときに、その御住職が開山百拙元養の絵を見せてくださったことである。

十六羅漢の背景が特色のある文人画的なものだったことから、それを調べてみようとしたのが、黄檗との関わりの始まりで、これから黄檗文献を調べ始めた。

当時二人の黄檗文献の大収集家がおられた。その史料を拝見し、黄檗文献は多分野に拘わる極めて興味深い文献であることに気づいた。そして、幸いにも黄檗の語録の中から「雪中煮茶」や「煎茶歌」を見いだした。「雪中煮茶」は、寛文十二年十二月八日に隠元が松隠堂に僧を集め茶を飲み雪を眺めて詠んだ詩で、他の僧が韻を踏みながら付けていく詩を語録の中に次々と見つけた。「煎茶歌」は月潭道澄が作ったもので、月潭は隠元の来日を聞き長崎に出かけ隠元の弟子になり、侍者として隠元に仕えた僧。中国の文化情報を隠元から得ていた。この二つの資料から、文人茶である煎茶は、黄檗宗の伝来から始まると言ってもいいのではないかと考えた。そして黄檗僧

であった売茶翁から、彼にかかわる文人を通して煎茶が広まったと考え、広まる背景を明らかにしようとした。明代の煎茶が黄檗僧に受け継がれたことを、自分で確認したいという思いがあった。

宋の文人の茶の流れを汲む茶を、五山僧も受け継いでいたと想像できる。意味を込めた茶の飲み方が文人茶で、陸羽から盧全の時代に始まると考えてよいだろう。それが五山に入り、やがて茶湯になる。和様化が進んだ茶湯になった段階で陸羽盧全が言われなくなる。

明時代に入り、中国の文人が変質することや日明の国交が一時断絶することもあって、明の情報が入らなくなる。それが、江戸時代になり状況が変わる。隠元は福建の万福寺の住持だったが、中国江南の文人の営み（絵画、詩など）を黄檗僧が持ってくる。また僧達に情報が送られてくる。蘇州を中心に活躍した呉派の情報が、黄檗を通じて日本にはいつてくるようになる。また中国についての勉強のし直しが起こり、中国文化の再認識が行われる。そのなかで煎茶が広まる。

例会の御案内

東海例会

次の日程で開催します。会場は名古屋文化短期大学です。ふるってご参加ください。

○九月二四日（金）午後六時から

「李朝のやきものからみた高麗茶碗」

金 巴望氏

「『茶譜』に見る流儀の茶の成立」

伊東明弘氏

○十一月二六日（金）午後六時から

「尾張徳川家の御庭と御庭焼について」

佐藤豊三氏

「未定」

田中秀隆氏

○二月二五日（金）午後六時から

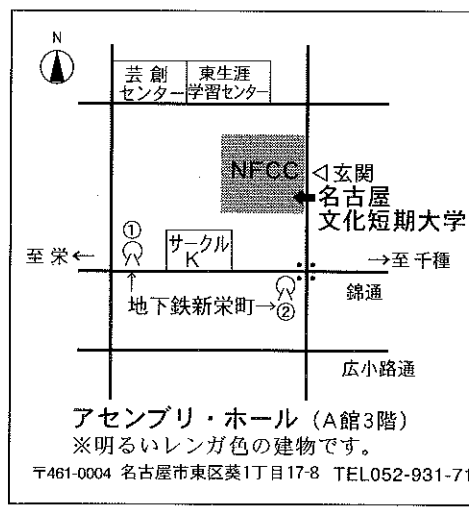
「尾張藩の茶の湯」

戸田勝久氏

高知例会

前号でお知らせした一二月一二日の例会はシンポジウムの開始が一〇時、茶事の開始が一二時に変更しましたのでご注意ください。なお、シンポジウムのテーマは未定です。

東海例会々場（名古屋文化短期大学）



後記

*本号の発行が遅れたことをお詫びします。
*本号は、増頁をしたのですが、五月の記念茶会と、総会・大会のご報告だけになってしまいました。茶会四席の会記を掲載しましたが、抹茶と煎茶で、また会派で表記の仕方がかなり違うことを認識しました。スペースの関係で、いただいた会記を省略したり改めたりしたところがあります。席主の先生方に、おしかりを受けねばならない点が多いのではないかと恐れています。